

〈特集〉雑誌『Olive』研究

花田（栗尾）美恵子『Olive』の頃を語る

聞き手・小宮京、藤根秀佳

構成・藤根秀佳

解題『Olive』における栗尾美恵子

花田（栗尾）美恵子氏インタビューの意義について、簡潔にまとめたい。本解題では『Olive』（以下、『オリーブ』とも）活躍時に關しては栗尾と呼ぶ。また敬称は略した。

栗尾美恵子は一九八〇年代半ばの『オリーブ』誌上で読者モデルとして活躍した。

だが、この事実すら従来は明確に示されなかつた。そもそも、いわゆる「読者モデル」の定義が明確でないこともあろう。¹さらに、花田（栗尾）が『オリーブ』について喋っているインタビューはおそらく存在しないことが大きな理由であろう。それゆえ、オリーブに関する著作でも、栗尾を「読者モデル」と書くもの、「専属モ

デル」（山崎まどか『オリーブ少女ライフ』河出書房新社、二〇一四年）、あるいは単に「モデル」と表記するもの（酒井順子『オリーブの罠』講談社、二〇一四年）、が混在している状況にある。いうまでもなく、読者モデルと専属モデルには大きな違いが存在する。それにもかかわらず、事実が明らかでないことは甚だ意外であつた。

近年の筆者の関心事でもあることから、事実関係を確認するためにインタビューを申し込んだところ、ご快諾頂いた。インタビューは二〇二〇年二月二七日に青山学院大学で実施した。藤根が作成した質問票を事前にお渡しして、当日はおおむね質問票通りに進行した。インタビューに臨んだのは小宮と藤根である。語って頂いた

当時の想い出を、藤根が項目ごとに整理した。

結論から言えば、栗尾美恵子は最後まで「素人」であり、『オリーブ』と専属契約を結んだ事実は存在しなかつた。要するに、現在でいう「読者モデル」であつた。その意味で、読者モデルの歴史に关心を持つ者にとって貴重な証言である。同時に、未だ十分に存在しない『オリーブ』関係者の証言としても貴重である。⁴後世に活用して頂ければ幸いである。

ところで、読者モデルとしての栗尾は、『オリーブ』において、どのような位置を占めているのか。

ここから先行研究を踏まえ、簡単に紹介したい。

本特集に収録した脇川論文は一九八〇年代の読者モデルの実態を明らかにした。そこで取り上げた雑誌のうち、『オリーブ』⁵では栗尾の占める地位が極めて大きかつたと論じた。そもそも『オリーブ』における読者モデルの活動頻度はさほど高くはなく、せいぜい二・三回程度しか登場しなかつた。『オリーブ』がリニューアルした一九八三年九月三日号（二九号）から一九八七年八月十八日号（一二〇号）までを調査した結果、二回以上登場した日本人モデルは、栗尾美恵子（一九回）、斎藤菜子（三回）、遠藤康子（三回）、湖藤毬古（三回）、中山美穂（二回）、桜井君枝（二回）の六人であった。

遠藤や中山といったアイドルに混じって、栗尾は一九回という破格の登場回数を誇ることが分かる。

このように『オリーブ』誌上、特筆すべき存在であつた栗尾は、この間の誌面で「モデル」としかクレジットされなかつた。つまり読者は栗尾のクレジットから「読者モデル」とも「専属モデル」とも判別することは出来ない。ただし、一九八四年九月三日号（五二号）の読者モデル募集欄に「四二号の通学スナップがきっかけで栗尾さんも、本誌の読者モデルに」という記述が存在する。このように、誌面を詳細に確認すれば、栗尾が読者モデルであることが分かる、と脇川は指摘した。

紹介した脇川論文を踏まえ、なぜ栗尾が『オリーブ』初の専属モデルとされてしまつたのかについて若干の考察を加えたい。

二〇二〇年一一月二二日現在、Wikpediaで「初の専属モデル」と記されている。⁶その他、多くのネット記事などで、栗尾は「専属モデル」と紹介されてゐる。このインタビューで語られたように、また、脇川論文が当時の『オリーブ』本誌で確認した通り、「専属モデル」は誤りである。

読者モデルである栗尾は登場回数を踏まえると、文字通り「『Olive』の顔」というべき存在であつたこ

とは間違いない。高校卒業を特集した記事では、誌面に登場して以来「三年間はオリーブ少女の代表として大活躍」と書かれている。⁷この記事は六七頁で終了する。

その直後の記事で「ティア、ケリがオリーブ少女の仲間入り」「ふたごのティア、ケリは一四歳！『オリーブ』の専属モデルになりました」と書かれていた。⁸読者にすれば、栗尾が卒業してから、代わりに専属モデルのティアとケリが登場したと受け止めたであろう。読者の誤解を誘うような誌面作りがされていたことからみると、ティアとケリが専属モデルになつたことから遡つて、栗尾を専属モデルと理解したのではないか。

以上は推測に過ぎない。だが、専属モデルと見紛うほど、雑誌のイメージを体現し、雑誌に頻繁に登場したことが、栗尾を一部の（多くの？）読者に専属モデルと誤解させたのは間違いないだろう。専属モデル並みに、いやそれ以上に雑誌のイメージを体現しつつ、それでもなお読者モデルとして活躍した栗尾は、雑誌誌上きわめて独特かつ類を見ない存在と評価できよう。

また、一九八六年に刊行された『活人』では、「'86年生のニューアイドルたち 夢見る発光体」というコーナーで、斎藤由貴、中村あゆみ、NOKKO、奥田圭子、栗尾美恵子、鷺尾いさ子、杉浦幸が紹介されている。⁹こ

の当時の栗尾の位置づけを知る手掛かりとなろう。栗尾を紹介する記事は「清らなザ・オリーブ少女」となっている。¹⁰

インタビューに応じて頂いた、花田美恵子氏に重ねて感謝する。

（小宮京）

目次

①『Olive』の読者モデルになるまで

一 校門前でスカウト

二 『Olive』初掲載

三 家族会議

四 栗尾さんにとっての『Olive』

②読モ時代

一 読モか専属か

二 笑わないモデル

三 淀川美代子編集長

四 特別な読モ

五月イチくらいのモデル活動

六 撮影現場

七 他のモデルとの交流

八 出演料

九 学校での栗尾さん

一〇 モデルになつて変わつたこと

一一 蝦名編集長

一二 信太編集長

③雑誌企画について

一 「夢中になつたらとまらない、一五歳キラッ！」

『Olive』一九八四年六月三日号

二 「不思議な夢に包まれてわたし達。」『Olive』

一九八四年七月三日号

三 「いいことありそうな予感、思いきつてわたし、髪を切る！」『Olive』一九八四年十月三日号

四 「男の子をドキドキさせるデートのおしゃれ、大西厚樹さんに相談！」『Olive』一九八五年四月三日号

五 「カツコいいね、とんねるず。オリーブ少女と、おしゃれ戦争！」・「所ジョージさんに秘密の相談、わたしの内気、なおる？」『Olive』一九八五年八月三日号

六 「栗尾美恵子の憧れのパリ、ドキドキ案内！」

『Olive』一九八五年十一月三日号

七 「卒業しても、オリーブ少女ね！」『Olive』一九八七年三月三日号

八 「花田美恵子さん三三年ぶりに誌上カット 髮を

四〇センチ切つて、人生をリセットする。」『ku:nel』

二〇一八年一月号

④モデル引退

一 『Olive』卒業

二 その後

⑤現在

一 大人になつた今でも“栗尾さん”

二 花田さんにとっての『Olive』

①――

花田…〔配布資料を見ながら〕この写真が一番最初の時ですね。¹¹編集部のカメラマンと編集の方が、学校の正門を出た所に立つていらつしゃつて、友達と下校するところをつかまりました。通学時の私服のスナップ写真を撮るために取材にいらしてたんです。ゲリラ的な取材で、私も全く予期していなかつたので、普段、学校へ行つてた服装そのままですね。それをこんなふうに上手にまとめてくださつたんです。当時は私、あまりファッショントークなどに興味がなくて、普段から一応校則はある中でこんな服装で成城学園に通つっていました。通学時の私服を特集するつていふ企画でした。

撮影された時は、この写真を編集部に持ち帰つて選ぶから、採用されるかどうかも分からぬって言われたんです。他にもたくさん取材されていたんで、

出るようだつたら連絡しますつていうことでした。

だから私も別に深く考えていなかつたんです。その後、編集部からお電話があつて、次の号で写真使い

ますつて連絡が来ました。その写真が当時の副編集

長の淀川美代子さんの目に留まつて、ぜひこの人を読者モデルにと、「配布資料を差しながら」次はこつちになるんです。この時も私は素人だつたんですけど、他の方はモデルさんも入つてしたりして、プロの方も混ざつた中で、また別の企画で使つていただいてというか、お声が掛かつたという経緯です。

小宮.. 最初にスナップショットを撮られた時には、「オリーブのカメラマンです」と名乗られたんですか。

花田.. そうです、そうです。お名刺も持つてらつしやつたし、雑誌も持つてらつしやつて。

小宮.. カメラマンだけがいらしたんですか。

花田.. カメラマンさんと編集の方ですね。この特集の時は、こういう私服の学校、成城学園とか、多分青学にも取材にいらしてたと思います。これは素人の方です。とお友達、これは一人のショットもあるし、みんな

で撮つたのもあるしつつていうことで、その企画の一つでした。

小宮.. 最初に掲載が決まつた後に、二回目の撮影の声がすぐ掛かつたんですか。

花田.. ええ、こつちですね、これ、¹²はい。

①一二

花田.. 最初に撮影された時は、写真を撮られたこともすぐ家に帰つて言わなかつたぐらい、載るか載らないか分からぬって言われたので、載つたら言おうかなぐらいでした。載るつて連絡が来たら、母がその時お店に並んでいた『オリーブ』を買つてきてくれました。自分もあまり知識がなかつたので、『オリーブ』つてこういう雑誌なんだ！つて慌てて勉強しました。その次の号ぐらいに写真が掲載されました。

小宮.. 最初に掲載されたときの周りの反応はどうでしたか。扱いがかなり大きいですよね。

花田.. そうなんですよ。私より先輩の方がちつちやかつたり、一緒に写真を撮つてもらつたはずの友達も載つてないし、あちゃーと思つたんです（笑）。でも、みんな好意的に教室でも見てたし、それを私も一緒に見てたしみたいな感じのすごく優しい友達が多い学

校でした。

撮られたのが中三の卒業前だつたんです。ちょうど雑誌が出るのが卒業式ぐらいでした。

①一三

花田…二回ぐらい撮影が終わつたところで、副編集長の淀川美代子さんと父が話し合いました。まだ未成年でするので、編集部に呼ばれて、今後、読者モデルといふ形でうちの雑誌で出でてくれないかっていうお話になつたんです。私自身全くこういう芸能界とかモデルとかそういう職業に、自分がそういうのになれると思ってなかつたものですから、思つてもみない話でした。父親が航空会社にいたもので、当時からC Aになりたいって思つてたんですね。その夢はずつと持つてたので、学業優先でさせていただけるのであればぜひとうことで、家族会議をして父が編集部に行つてお話をさせて頂いたという経緯です。それで読者モデルとして登場することになりました。

小宮…お父さまと淀川さんが話し合われたというのは、淀川さんのほうから継続的にもつと出てほしいと言われたんですか。

花田…はい、そうです。一度家族会議をして、私の意志確

認をされて、学業優先でできるのであればやつてみたいと話しました。

小宮…家族会議の時、ご両親の反応はどうでしたか。親御さんからしたら、突然編集部の人があつて来て「ええ?」って話ですよね。やめろという雰囲気でしたか。

花田…編集部からお電話頂いてたりとか、お会いしたいときちんとお話が来たことと、プラス私の意志です。私がもしプロのモデルをすごくやりたいんだつたら、それを後押ししてくれたのかもしれません。でも、私は絶対自分が目指してるものがあつたし、大学にもこのまま行きたいって思つていました。親も思つてた通りにお話が進んだと思います。

小宮…『オリーブ』に掲載されていた頃、いろんな事務所からやつてみないかとお誘いが掛かつたんじゃないですか。

花田…後になつて淀川編集長からお聞きしたのですが、いくつかお話はあつたみたいでした。CMのお話とかも頂いていた様ですけれど、最初の父との約束があるから全部お断りしてくださつたようです。結構有名な事務所とかからもあつたらしいです。

小宮…もし淀川さんを通さずに打診して来たら、どう対応

されたんでしょうか。

花田.. 私がCAになりたいっていう意志がすごく強かつたのと、まさか自分が芸能界で長くとか第一線で活躍できると思っていなかつたし、お断りしたでしょうね。両親ともサラリーマンの家庭で普通に育つたから、芸能界なんて怖い怖いぐらいな感じでした。そういう意味で淀川さんがいてくださつてよかつたなって思います。

①—四

小宮..『オリーブ』は中学時代にみんなで読んでいたんですか。

花田.. 正直なところ、自分が出るまでは見た事がありませんでした。名刺を持つていらした時が初めてぐらいの、はい。「オリーブ少女」っていうのも知らなかつたです。

小宮.. ある学生が卒論で『オリーブ』を調べたところ、いわゆる読者モデルがたくさんいたそうです。

花田.. ええ、はいはい。

小宮.. 彼女が各読者モデルの登場回数を何年間か数えたら、栗尾さんが圧倒的に出ていて、別格だと結論付けてました。¹³

②—一

小宮.. 一緒に誌面に出ている方のなかには、プロのモデルさんもいらっしゃいましたね。栗尾さんは専属契約を結ばないかというお誘いはありましたか。

花田.. 編集部とですか。

小宮.. ええ。

花田.. 編集部もそこまでの拘束を希望されていなかつたと思います。ですから毎回の撮影が、都度という感じでの契約だつたので、そういう緩い感じがお互いにとつてすごくいい間柄だつたのかなつて、今では思つていますね。今でこそ誰もが知つてゐる読モの第一号ということで、テレビでも一度取り上げられたことがあります。それまであまりなかつた言葉みたいで、素人の人が雑誌のモデルになる初代読者モデルと言われてゐるみたいです。

小宮.. 学生の卒論を読んでると、栗尾さんを読者モデルと書いてる本と、専属モデルと書いてる本があつて、混乱してます。

花田.. ああ、そなんですね。

小宮.. どちらが正しいか分からないから、本人に確認するしかないと思つてインタビューを申し込んだんです。私は誌面に関しては編集の方が全部やつてらしたの

で、チェックもすることもありませんでした。一応インタビューみたいなのはされましたけど、最終的には多分淀川さんや編集のかたがされてたと思うので、その時のその扱いに関しては、多分編集部のほうでのご判断だったと思います。自分自身のスタンスは毎回、素人ですけどこんな感じで大丈夫かな？っていう気持ちでした。

②

花田…すごく印象的だったのが、普通モデルさんってとにかく笑顔というか、カメラを見たら笑えっていうぐらい私も知つてたんですけど、この撮影の時は、笑うなって言われて、全部こんな感じなんですね。それが不思議で、初めての撮影、こういうファッショング撮影で、笑うなって言われたのが私にしてはすごい衝撃的で、家に帰つて母親に報告したぐらいです。『オリーブ』って、こういうトーンの写真がすごく多いです。髪はくるくる巻いてぐしゃぐしゃにくずして、袖は長めにルーズに着崩して、みたいな。いつも私は何の事情も知らずにその場にポンッと置かれただけだったので、いろいろと不思議なことがたくさんあって、分からまま進んでいきました。

で、チェックもすることもありませんでした。一応インタビューみたいなのはされましたけど、最終的には多分淀川さんや編集のかたがされてたと思うので、その時のその扱いに関しては、多分編集部のほうでのご判断だったと思います。自分自身のスタンスは毎回、素人ですけどこんな感じで大丈夫かな？っていう気持ちでした。

藤根

…私が雑誌を見ていて、あまりカメラ目線でばつちり決めて笑っているみたいな写真がほとんどないのが、なんでだろうな、聞きたいなって思つていて。

花田

…笑っちゃいけないという指導があつたぐらいで、他はポージングとかそういうのも一切言われたことがないです。だから、オーディションを受けて選ばれて撮影にきたような、同じ企画に掲載されている彼女はそうだつたんですけど、きっといろんな勉強とかもされていました。でも、私は何も知らないでぽつとここに立つててくださいっていう感じだつたんで、何も分からぬいで撮影現場にいました。

藤根

…その笑わない顔がむしろすごくいいというのは、雑誌を見ているとすごくよく分かります。オリーブっぽいですよね。

花田

…オリーブっぽいはこうなんだつていうのは、今とか後になつたら分かるんですけど、当時は何だらうつていうはてなマークがいっぱいで、とにかく笑っちゃいけないっていうことだけが頭の中で渦を巻いている様でした。

正直なところ、どの人がプロのモデルさんで、どの人が読者モデルなのかも自分で想像しながら撮影は進んでいったという感じです。

小宮..撮影中の淀川さんからの指示について、こういうことをしてはいけないとか、こうしなさいみたいなのが、覚えてることありますか。

花田..もうその笑うな（笑）。笑わないでっていうぐらいですかね。周りのスタッフも信頼されている方ばつかりだつたんで、こここの企画とかもなんです。そう

やつて、ご自分のイメージが伝わっている人が周りにたくさんいらっしゃったのの集まりがこの『オリーブ』っていう雑誌だつたんだなあと思います。

②—三
小宮..『オリーブ』以外の雑誌、『活人』にグラビアとかプロフィールが載つたりとか、あるいは『週刊朝日』にも出ておられます、他の編集部から突然声が掛かってきたんですか。

花田..それもですね、実をいうと、淀川編集長からお話をいたいたものなんです。

小宮..そうなんですか。

花田..そうなんです。だから『活人』も淀川さんのご交友関係の方からのお話で、OKと思つたものに関して私は連絡くださつていたんです。『オリーブ』以外で載つているのは全部そうなんですよ。

小宮..そういうことなんですね。

花田..あと、同じマガジンハウス内の雑誌とともに、全部、一度淀川さん預かりだつたっていうのが実情です（笑）。

小宮..他の雑誌に出たのも全部淀川さんのおかげなんですね。

花田..そうですね。それぐらい責任を持つてやつてくれましたことに、うちの父もすごく感謝していました。私もそれがちょうどいい感じでやつてきたのがよかったです。

小宮..淀川さんは栗尾さんを見たときに何がよかつたんでしょうか。

花田..何ですかね。多分、思つていらつしゃった雑誌のイメージに一番近かつたのかなあ。それと、これは一番初め淀川さんとお仕事した時の企画なんですが、原宿で撮影したんですね。このスタッフの方も淀川さんのこの……、ほんと淀川さんのお話ばっかりになるんですけど、親しくされているカメラマンさんとスタイルリストさんということで、これは淀川さんが撮影に立ち会つてくださつたページですね。この二つの企画とか。あ、これ同じ企画だ。こっちが軽井沢に行つたのと、こっち原宿でのやつで。

小宮..『オリーブ』編集部やマガジンハウスとのお付き合い

というよりは、淀川さんとのお付き合いだったなんですか。

花田..詳しくはわかりませんが、編集部で企画会議を経て、

毎回担当の編集者の方と現場でお仕事する……というような感じでした。毎号淀川さんチェックが厳しかったみたいで、どの写真もなんですけど、私のページに限らず、淀川さんの目の行き届いている雑誌であつたことは間違ひありません。だからこそ、こうやっていまだに取り上げていただけるような、歴史に残る雑誌になつたんだと思います。

藤根..なんかすごい。

花田..そうなんですね。

藤根..思つていたのと全然違うなあつて思つて。

花田..あ、ほんとですか。

藤根..淀川さんがそこまで間に入つて回つているとは思わなかつたので。

花田..はい、すごく特別だと思います。淀川さんは『オリーブ』の後は『an・an』編集部に移動されて、

ずっとマガジンハウス内を渡つて行かれた雑誌は必ず売り上げが伸びるっていう、ほんとに伝説の方で、

そちらにある『kunel』もいまだに編集長をされてい

ます。

淀川編集長とは今でもお付き合いがあるぐらい、公私にわたつて親しくさせていただいてます。「業界の母親」つていうと「お姉さんよ」つてご自分でおつしやる様な、いまでも現役バリバリな方です。

小宮..花田さんから見る淀川さんはどういう方でしたか。

花田..いまだにベールに包まれている部分もありますね。初対面の時に、つばのついた帽子を被つていらつしゃつて、私の周りにそういう方つていらつしゃらなくて、当時はまだ四〇代だつたと思うんです。今、自分はその当時の淀川さんよりも年上なんですがれど。すごくかつこいいつていうか、ファッショントリの最先端の方に初めてお会いしたぐらいの、出版界の、しかもファッショントップの方つていうのは、あんまり分からぬなりにも、なんかすごいオーラのある方だなあつていう印象でした。

小宮..この企画の時が初対面だつたんですね。

花田..そうなんです。何も分からずにお会いしました。撮影の時にいらっしゃつたので、編集の方かなとかいうぐらいだつたんですけど、後々いろいろお話を伺いました。

小宮..撮影のときに淀川さんがいらっしゃることはよくあ

るんですか。

花田…めったにありません。スタッフの方、このカメラマンさんとスタイリストさんが淀川さんのすごくお親しくされている方だつたみたいです。斎藤亢さんと、この西野さん^{〔＝西野英子〕}つていうこのメンバーでのファッショングページ¹⁵がオリーブのイメージを象徴していたんだと、後になつてわかりました。この辺りは全部淀川さんのお考へだつたと思います。小宮…淀川さんは厳しい方という印象ですか。

花田…厳しいですよ。いまだにいろいろ注意も受けるし、編集部の方はみんなびりびりしていました。

小宮…へえー。

花田…小柄な方なんですが、昔からお奇麗で、仕事に対しては情熱的で、「プラダを着た……」¹⁶つて、よく皆が噂してた様な方ですね（笑）。

小宮…そういうタイプなんですね。

花田…そういう方とご縁があつて、いまだにお付き合いができるつてすごく恵まれてるというか、周りの方にすごく支えていただいてるなとは思いますね。

藤根…『オリーブ』¹⁷を回顧するイベントが、金沢の美術館で企画されて、そこで淀川さんがインタビューに答えていたんですけど、淀川さんいわく、スタイルリスト

の方の影響もすごく強かつたみたいな。メークさんとかのやり方で、誌面が完成していたみたいに話されていました。すけれども、やっぱりそのスタイリストさんとかメークさんとかは、誌面作りに大きな影響を与えていたのでしょうか。

花田…その人選からまず淀川さんがされてたと思うので、どのページにも淀川さんの息が掛かつてたと思います。すごいなつて思うのは、編集長さんなのに全部写真をチェックしたりとか、確固たるご自分のイメージがありなんだなあつていうのは伝わってきます。今でも現役でお仕事されていて、一度役員までなられて一線を退いた後に、また『kunel』に関わつてらつしやつて、ほんとに雑誌を作るのがお好きなんだなあつて。すごいと思いますね。

藤根…やっぱり淀川さんぐらいの大きい力がたくさんあつたわけではなくて、淀川さんが選んだチームが……。

花田…そうですね。淀川さんを筆頭に、みんなで作り上げた世界観がオリーブと言う雑誌になつていたと思います。みんなそれもすごい理解されてた編集部でした（笑）。みんなどこかで淀川さんを尊敬する部分があつたから、成り立つてたんだろうと思いますね。

小宮…そういうのも撮影してるとだんだん分かってくると。

花田.. そうなんです、そうなんです。子どもながらに「あ

あ」と思つたんですね。でも、私は一人だから、誰とも話す人がいないので、家に帰つて母と話しました。

②—四

藤根.. 淀川さんが間に立つていろいろ回してくれたというか、すごく目をかけていたというのは栗尾さんだけですか。

花田.. 多分そうですね。他のモデルさんだつたら事務所の方もいらっしゃるから。同じような読者モデルつて

いう普通の素人の方で、そんなに頻繁に出てる方もいらっしゃらなかつたと思うんです。出ても二回とかぐらいだつたかなあ。何人かよくお見掛けする方もいたんですけど、その差はすごくあつたと思いますね。それは淀川さんがすごく目をかけてくださつていたのと、父との約束でしうね。他の雑誌には出ないつていうのも『オリーブ』に対して貫きました。普通のモデルさんだつたらいろいろ出ると思うんですけど、私自身あんまり広げる気持ちもなかつたので、特化しやすい存在だつたのかなあって。

②—五

花田.. 『オリーブ』から依頼が来るときのことを教えてください。「今回原宿行くよ」とか、「こういう企画なんだけど」みたいな感じで連絡が来るんですか。

花田.. それも編集の方次第でしたね。「ヘア企画があつて、この辺で日にち空いてますか」つていう感じで連絡が来るんです。だから、あんまり詳しいことも言われませんでした。この髪の毛を切つた企画がよく取り上げられますね。¹⁸これも誌面になつてから、あ、こういうページだつたんだなあつて知るぐらい、撮影に行つてスタッフの方とお仕事をして帰る、いつもそういうパターンでしたね。

藤根.. 電話が来て、行つて、写真を撮つて、どう出来上がるが全く分からぬ。

花田.. そう、選ぶこともできなかつた、写真も。

藤根.. 手元に来て、あ、こんな感じでページが出来るのか出ないつていうな。

花田.. そうなんです、ほんとにそうなんです。

藤根.. それから「原宿を歩いてみる」みたいな企画では、栗尾さんの語り口調風に書かれているんですけど。

花田.. 全部編集部です、実は（笑）。何も分からずに、ほんとに撮影にだけ行つてました。

事務所にも所属していなかつたもので、月に一回ぐらいい、当時は携帯もないから家の電話に直接仕事の電話がかかつてきて、「何日空いてますか」。ですから、仕事は学校の後か週末で、それも月一回だけぐらいのスタンスでずっとやつていたんです。必ずしも毎月でもなかつたですし、その企画で私が必要つてなつた時にお声が掛かるつていう感じでした。口約束のままのモデル活動だつたんですね。だから、すごく珍しいケースだつたとは思います。

楽しかつたですし、月に一回ぐらい行つて、メークもしてもらつて、新しいファッショソ着せてもらつて、普通だつたらなかなかできない経験なので、そのうえお小遣いも頂けて！アルバイト感覚で、高校生の三年間はこの『オリーブ』つていう雑誌に関わつていたんです。他にアルバイトもしたことなくて、月に一回あるかないかのそういうスタンスが私にはちょうど良かつたんです。

影には全然いらつしやらなかつたです。その企画ごとの担当の方が、毎回違う方がいらつしやいました。

藤根..特に、さつき斉藤さんと西野さんに会えてよかつたつていうことだつたんですけど、他にといふか、特に花田さんと仲良しなスタイルリストさんとか、好きだな、仲良しだなみみたいなスタッフさんは。

花田..最初は私もこの仕組みが分からなかつたんですけど、このマガジンハウスのカメラマンさんつていうのと、この斉藤さんつていうのは別で、この方は……、他にも広告のお仕事をされたりしているフリーのカメラマンさんでした。社外の方でした。

小宮.. そうなんですか。

花田.. そうなんですよ。そういうのも全く分からなくて、何回か撮影しているうちに分かつてきました。子どもながらにすごい社会勉強をさせて頂いたなつて（笑）。でも嫌な雰囲気は全然なくて、そんな中やつぱりご一緒する企画が多い編集の方にファッショソショー連れて行つて頂いたり、たまにですが、ファッショソ誌ならではのイベントにつれて行つて下さる事は何度かありました。そういう大人の方とお付き合いできるのがこの仕事に携わつてよかつたつていうか、いまだに覚えてることとかもたくさんあります。

(2)
一六

小宮.. 二回目に誌面に登場した時点から、最初の担当者と

いうか、淀川さんがいらっしゃつたんですか。

花田.. 淀川さんは副編集長されてい立場だつたので、撮

んあります。こうやつて形に残つてゐたなかなかないことなんで、若いうちに貴重な体験をさせて頂いて感謝しています。

②一七

小宮.. 他にも素人の方もいらつしやつたと思うんですけど、撮影のときにお会いする機会とかありましたか。

花田.. あんまりなかつたんですね。何かの企画で一、二回ステジオでそれ違うぐらいでした。お互いの情報のやり取りもないですし。

小宮.. 同世代の人がこの『オリーブ』に関わつてたというか、見かけたりといふことは、読者モデルとかでちょっとといらつしやつたぐらいなんですか。

花田.. 多分このページに出てたかなあと思うんですけど、あ、ちょっと前に出たのかな。玉川学園の同じ年の

彼女がいて、彼女もJALに入りたいつていうことで、伊豆亮子さん、その方も何回か出てらつしやつたと思います。その後、JALに入つて会う機会がありました。共通の友達が多くて、ここ何年か前も会つたりとかしているので、『オリーブ』がなかつたら多分知り合わなかつたようなお友達とも、自分たちが歩んできた道が同じで、就職、結婚を経て、い

まだに交流が続いている人もいますね。彼女も魅力的な人で、そういう方とオリーブに載つていた頃のお話ができるのはすごく嬉しいです。

②一八

小宮.. 出演料がいくらだつたか、聞いていいですか。

花田.. 当時の高校生には有り難いお小遣い程度を頂いていました。

小宮.. へえー。

花田.. ページ数にもよるんですけど、これは多分六ページぐらいの企画や、ちつちやなヘアの企画とかだけで、同じ金額貰えたこともあれば、場合によつては半額になつたりとか、多少は変動しました。私は大満足だつたので、何の不満もなく、楽しく過ごさせてもらつてました。多分そういう雰囲気も伝わつたのかなって思います、誌面から。変にこうガツガツ仕事をしたいつていうわけでもなかつたですし、あり

のままの学生生活でした。

②一九

花田…最初に撮影された時、中三だつたんですけど、この同じページには高校の方も、同じ学校の高校——全部幼稚園から大学まで同じ所にあつたので——先輩も写っていました。一緒に撮られた友達はこの時載らなかつたりとかで、気まずい思いもしました。でもそういうのでいじめになつたりする学校じゃありません。成城学園は芸能活動しているお友達もいましたし、足を引っ張つたりとかいじめが割と少ない学校だつたんで、みんな友達も買つてくれたし、それを横で自分も一緒に見ていたりとかつていうことで、和気あいあいとやつてました。別の号にはお友達が出ていたり、すごくいい雰囲気でお仕事させてもらつて。

モデルをしていることで特別扱いされることもなかつたです。ご両親が芸能人のお子さんもいらっしゃつたし、そういうことに慣れた学校だつたので、学校の中では普通に過ごせました。

小宮…「卒業しても、オリーブ少女ね！」¹⁹を見ていたら、中高時代の卒業アルバムや普段の様子が載っています

ね（六四一六五頁）。

花田…写真を提供してって言われたんです。

小宮…そうなんですか。

②一〇

花田…でも雑誌の影響力ってすごくて、たまに渋谷とか出掛けたときに、指をさされたりっていうことがありました。そういう時に、改めて『オリーブ』って影響力のある雑誌だつたんだな、ああ、すごいんだなっていうのは実感しました。だから、私もあんまりイメージを崩しちゃいけないな、という自覚は有つて、さらに父親が編集長さんとお会いしたこと也有つて、補導されたりとかももちろんそんなことはないんですけど、そういうことはしちゃ駄目っていうのは頭の隅にもあつたし、みんなが見る雑誌に出来ているから、問題を起こしちゃいけないなっていうのは、自分自身の規制っていうか、いつも片隅にありましたね。あまり変なところを周りの人見られちゃいけないな、淀川さんに申し訳ないなって。すごくちゃんと私に対してもやつてくださつていた

から、それがせめて私ができることかなというふうには思つてましたね。

小宮.. デイスコとかゲームセンターにも行つたことがない

のは、意識していたんですか。

花田.. 別に行きたかったのを我慢したわけじゃなくて、元々そういうの好きじゃなかつたので、行かなくても全然ストレスにはならなかつたんです。父親がその後香港に単身赴任したので、長い休みは私もそこに行くのが楽しかつたんです。あんまり夜出歩くのも好きじゃなかつたし、あとアルバイトしていっぱいお金を稼いで何かに使うとかつていうのでもありませんでした。モデルのときに頂く出演料をこつこつためても使うあてもなくつて、いうような学生生活だつたので、何も不満もなくて、ほんとに楽しい思い出ですね。

いまだに同年代の方から「『オリーブ』見てました」ってよく言われます。あいさつ代わりぐらいに言われるんで、ああ、やつぱり歴史のある雑誌だつたんだなつて思いますね。

さんは副編集長でしたね。

花田.. はい、そうです。

小宮.. 蝦名さんの印象をお聞かせください。

花田.. 編集部に行くことつてあんまりなくて、たまに撮影の後に寄つたときに、忙しくお仕事されている中で、蝦名さんは男性でもありましたし、にこにこしていらっしゃる方でした。ごあいさつ程度であんまりお話をしたことなくて、すごく優しい方でしたね。

実は、淀川さんとも当時はあまりお会いすることはなかつたです。私が結婚して離婚を経て子育てが一段落した最近の方が頻繁にご連絡頂いています。両親が他界してしまつたので、今の主人も淀川さんに真っ先に紹介しました。

(2)――

小宮.. 淀川さんの次の信太編集長はどういう方でしたか。

花田.. 私が最初関わつた時は、編集の方だつたんですけど、後々編集長さんになられて、その時も私も撮影の現場に行つて帰るということで、あまり編集部で信太編集長とお会いすることもありませんでした。

(3) —

藤根…他のモデルさんと出ている企画、ふたりペアみたいな感じの。あれも当日会つて、はじめまして、お願ひしますみたいな感じなんですか。

花田…そうなんですよ。だから、もう一人いらっしゃるっていうのも全然知らなくて、私は何日の何時に行けばいいんだなって、行つたらもう一人いて、あ、今日はご一緒なんだつて思いました。彼女「＝遠藤康子」がどういう方かも知らなくて、もう長く芸能活動されてた方で、撮影したらプロフェッショナルだなあって思うところがあつて、わあ、すごいと思いました。彼女が帰り際に「また使つてください」つて編集の方に言つたのがすごく強烈に印象に残つて居て、プロの方つてこうやつてお仕事をどんどん取るんだなあって思いました。それは違うわと思つて（笑）、私はなんかぼーっとしてたみたいな。そういう違ひがあつたのが、うまく隠されてるなあって。

その後、彼女がプライベートなことで自殺されたつていうショックキングなこともありました。私は撮影以外でご一緒するほど仲良くなかったから、芸能界つて怖いなあって思つたんです。当時、若い人の自殺が続いた年で、社会問題にもなりました。身

の周りでそういうふうなことがあつたのも初めてだつたし、世の中に出ても、こうやつてお仕事つてなると、いろいろあつたのかなあとか、子どもながらに思うしかなかつたですね。

(3) —

藤根…森の中で撮影したみたいな企画はどうでしたか。

花田…この見開きのもありましたね。あれは、軽井沢に行つて、一泊で撮影しました。

(3) —

小宮…有名なショートカットにした企画がありますね。

花田…この切つた後のがあるんですけど、これも最初、淀川さんから「髪を切りませんか？」と打診されました（笑）。いまだに皆さん一番印象に残つているつて言われますね。

小宮…最初に髪を切るとかそういう話はせずに日程だけ決めたんですか。

花田…切るというのは聞いていたんですけど、ショートカットにするつていうのは聞いてなかつたんで、私は。ちょっとだまされたぐらいな気持ちでいたんですね（笑）。家に帰つたらまあまあ評判もよかつたし、

まあいかと思つたんですけど。淀川さんは髪の毛切らせるのお好きなんですよ。そういうユニークな方です。たしかに一番変化を付けやすいですね。髪を切る。女性が髪を切るつて、いろんな意味が含まれますからね。そのぐらいの方じゃないと、伝説に残るような方にはなかなかれないと思います。

③—四

藤根..「ポパイ少年とデート」みたいな企画も、当日行つて、という感じでしようか。

花田..当日です。一応、デート企画ではあつたんですけど、誰が来るかも知らないし、どんな人かも知らず行つて、いきなり横浜かなんかに行つたと思うんですけど。

藤根..ああ、寒かつたという感想を言われていましたね。

花田..そうなんです。デート風を装つたつていう(笑)。

藤根..すごい。

花田..雑誌つてそういう世界観の下に成り立つてはいるのかなあって勉強になりました。

小宮..とんねるずは大丈夫だつたんですね。

花田..そうみたいです。

藤根..とんねるずと所さんとの対談記事は²⁰、さすがに前

もつて言されましたか。

花田..前もつて言われたんですけど、決して自分が会いたいって言つたわけではないです(笑)。編集部の企画です。ボツ企画になつたのでチエッカーズと一緒に撮影つていうのがあつたんです。当時チエッカーズがすごい人気で、ファンの方からのバッシングを考え、なしになつたことがありました。

小宮..そうなんですか(笑)。

花田..そんなこともありましたね。

小宮..一応会つたんですか。

花田..撮影 자체がなくなりました。

藤根..それを判断するのが淀川さんということでしょうか。

花田..多分、編集部の判断だつたと思います。「次はチエッカーズと撮影です」まで言つられて、この辺の日にちでつて言つてたのが、やつぱりなくなりましたって言つて言つれました。私もすごくファンだつたわけでもないんですけど、当時の人気を考えるとそれもそうだよね、と納得しました。

小宮..とんねるずは大丈夫だつたんですね。

花田..「所さんが好き」みたいに書いてあつたと思うんですけど。

花田.. 編集部で懇意にされてたのか、あの当時、本が有名でしたよね。所さんが収録中のラジオ局に取材に行くみたいな企画だつたと記憶しています。

藤根.. ラジオ局での撮影でしたね。

花田.. そういう特集だつたのかな。たまに有名な方との企画があつたりしました。そういうのも普通だつたらお会いできない方ばっかりだつたので、楽しかったです。

小宮.. チェッカーズとかはどうなんですかね。当時の『オリーブ』に合つてたんですかね。

花田.. あの着崩したようなファッショング「オリーブ少女」の共感を持たれていたみたいです。

③一六

小宮.. 記憶に残つてゐる企画はありますか。

花田.. パリに一回行つたことがあります。²¹ 当時毎年パリの

撮影があつたのかな。これも淀川さんも撮影に同行されて、ちょうど夏休みだつたんですね。それだったら私も行けるからつていうこと、この企画がたまたま一緒だつたんですけど、二週間位滞在して、私も初めてのパリで、編集の方と淀川さんとその撮影チームとつていうので、すごく貴重な体験でした。

③一七

小宮.. これを着て嬉しかつたという企画はありましたか。

花田.. 撮影ですごい自分が好きだつたのは、このページとか。²³ こちらも好きでした。²⁴ 当時はやりのメーク、眉をすごく太く描く時がありましたね、この時とか。²⁵ 普段メークもしない、いまだになんですけど、興味がなくてというか、ぶきつちよでもあるんです。毎

自分もこういうファッショングページの撮影があつたり、取材に行つたりつていうことがありました。

それから「髪を切る」という企画。²² ここにあるのが「資料を見ながら」、これが割とみんないまだに何があるとこの写真を持つてきますね。この大きいのがあるとこの写真を持つてきますね。この大きいの。切つてる顔がすごい不安げだつていうので（笑）。

小宮.. そうですよね。

花田.. 印象的な写真つてよく言われます。パリに行つたりとか、普通の学生生活を送つていたらできない経験たくさんさせてもらいました。変な規制もなく、モデルさんだから痩せろとか一切言われなくて、学校優先でスケジュールが合えばつていう形でやらせていただいていたので、大事にしていただいたと思っています。

回なんでこんなに眉を太くするのかな?と思つたら数ヶ月後は細眉が流行最先端になつて、されるがまでした。あ、こういうのが流行なんだ、と勉強になりました。

③一八

小宮：『kunel』二〇一八年一月号でもショートカットにさ

れていますね。

花田…これももちろん淀川さんからお仕事のお話を頂きました。五〇歳になつた記念にということで、またご一緒にお仕事させていただきました。ほんと私の歴史に淀川さんあり、ぐらい大きな存在ですね。

④一

花田…最初は月一くらいの頻度で出ていて、二年生、三年生になつて、何となく飛び飛びになりました。大学に入つて、そのタイミングで一度『a n · a n』に出させていただきました。決定的に卒業というか『オリーブ』やめますみたいのはありませんでしたね。あ、なんか今月はないんだな、ないんだなあっていうのが何となく多くなつていつてつていうか、自然にこうフェイドアウトしました。その間に

観月ありささんとか双子ちゃん「リティア・ケリのこと」とか、読者モデルという形で登場されている方もいらしたので、雑誌の上で明確な卒業みたいなのはなかつたですね。

小宮…編集部から卒業してと言われたわけではなく、だんだん声が掛からなくなるということですか。

花田…なんかね、そうなんです。

藤根…その編集部から声が掛かるのがフェイドアウトしていつたのは、栗尾さんの高校卒業を、編集部のほうから意識してなんとなく遠慮するようになつていつたという感じですか。

花田…ずっと同じ人よりもいろんな方が出たほうがページ的にもきっと面白いんですよ。私もずっと出ているわけにもきつと面白いんですよ。私もずっと出ているでなつてしまつたの。この双子さんもそうだつたと思うんです。その雑誌のイメージもあると思います。その中に、それと一緒に編集長も変わつたりというので、編集長の意向とかもあつたりするのかなあと思いました。

④一

小宮…『a n · a n』に登場なさつた経緯は、淀川さん経由

なんですか。

花田.. そうですね。それもまた髪の毛企画だったような気がする(笑)。「前髪を切る」みたいな。あとヘアメーク関係の人とか、みんな『オリーブ』をお手本にされてたみたいなんですよ。集大成じやないんですけど、これが一応卒業みたいな感じで『a n · a n』にちょっと出たりしました。就職活動の頃に、

当時『週刊朝日』が女子大生シリーズっていうのが、夏の数ヶ月間は一般の女子大生が表紙を飾るという

恒例の企画で、撮影が篠山紀信さんだつたんです。それも淀川さんがオーディション受けたらつて声を掛けたださつて、オーディションにももちろん行きました。最終の一二人くらいに残つてみんなでハワイにいきました。そして選考されて、二〇歳の記念に撮つた写真が表紙になつたつていう経緯もあります。就職する前はそれが最後でした。

小宮.. 最初から最後まで淀川さんが関わつておられた。

花田.. そうなんです。それでほんとに安心だつたですし、道を外すこともなく、きつと自分も希望の会社にも入れました。

藤根.. 今も手元にメモを用意してきましたが、栗尾さんの企画を二〇本くらい見てきました。

花田.. 自分が出てたものは全部本のままで取つてあります。今でも置いてあつて、見だすと止まらないん

です。一回実家に置いて、結婚してたときにも持つてきて、ハワイに引っ越しすつていうんでまた実家に送つてみたいな。すごい量なんんですけど、全部当時のままありますね、このまま。どのページつて本を切り取れなくて、やっぱり。

⑤

小宮.. 『オリーブ』の思い出、これだけは言つておかなければとか、語り残しておきたいことはありますか。

花田.. いまだにお声を掛けてくださるような同世代の方もいますね。最近ヨガを教えるんですけど、親子でヨガを受けた後に、写真撮つてくださいって言われるんです。お母さんと娘さんで来て、娘さんは全然知らない世代なので、どっちかつて言うとお母さんが一緒に撮りたいみたいな感じで来られますね。そやつて声を掛けてくださるのがすごく嬉しいし、その時は必ず「栗尾さん」って言ってくださるんですね。

小宮.. 雑誌を見ると、つい「栗尾さん」って呼んじやりますね。

花田..全然いいんです。「栗尾」って珍しい名字だったのですが当時はすごく嫌でした。

小宮..あんまり聞かない苗字ですね。

花田..そうなんです。でも私「『オリーブ』の栗尾さん」つてよく言われます(笑)。

⑤――

小宮..「オリーブ少女」を卒業することについてどう思うのか。あるいは自分が今でも「オリーブ少女」だなと感じることはありますか。

花田..自分自身が出ていた時も、私は「オリーブ少女」って思つてたわけではなくて、誌面はオリーブの世界観で、私はそこにいるあくまで一人の共演者みたいな感覚でした。周りの方がこれを見て、普段の私を知らない人も声を掛けてくれたりとかつていうのを体験して初めて、あ、ほんとにすごい影響力のある雑誌なんだなあっていうのと、この世界観がすごく確立されているなあというのは思いました。

逆にお聞きしたいぐらいで「オリーブ少女」って言う言葉が残つたりするところから、研究しようと思われたんですか。

藤根..『オリーブ』に興味を持ったのは、小宮先生のゼミ

で、雑誌に関する文献を読んだのがきっかけです。それらの文献の中に『オリーブ』について扱う記事があつて、そこで初めて『オリーブ』に触れました。『オリーブ』には、他の雑誌にはない独特の魅力があつて、とにかくすごく可愛くて、研究したいと思いました。

花田..ああ、三〇年たつてもそなんですね。自分が出でるからなかなか言いづらいんですけど、この世界観つて当時でも独特だつたと思います。

小宮..そなんですか。

花田..流行のファッショントラウザが多かつた中で、この世界観をずっと保つてたのは『オリーブ』だけだつたと思います。

小宮..卒論を書いた学生も、最初は『nonono』をやる予定だつたのが、『オリーブ』を読んではまつたみたいですね。読者モデルを調べてたら「栗尾さんかわいい!」とか力説して(笑)。『nonono』を取り上げる予定だつたのが、『オリーブ』の栗尾さん特集になつてました。

花田..ねえ、お会いしたかつたです。

小宮..「かわいい」つて繰り返してました。

花田..そなんですね。

小宮..だから今の学生にも通じるというか、はまる学生が

続出します。当時周りで『オリーブ』を読んでいた方、みんな読んでたっていう感じとも違うんですかね。

花田..コアな感じでしたね。好きな人はずっと読んでるつ

ていう感じでした。意外と男性で好きだつたって言う人も多いんですよ。この雑誌について語る人とか

もいっぱいいたし、どっちかというとオタクみたいな人が多かったです。そういう人たちって繊細だし、

心優しいし。中森明夫さんとこの仕事しててお会いする機会が何回かあつたんですけど、いろいろ研

究もされているし、淀川さんの作られた世界観が大好きでっていう、一本すごい通っているものがあるので。そこに自分がいたというのは不思議ではありますね。熱狂的な人が、特に男の人があつたね。

心優しい感じの人が（笑）。
小宮..男性編集者にお話を伺うと、「『オリーブ』いいよね」

花田..ああ、そう思いますね。

小宮..「読んでたんですか?」みたいな。

藤根..私のイメージだと、『オリーブ』のモデルさんは眉が

花田..

のようないわゆる太眉が流行っていたわけではないですね。

花田..その時のヘアメークさんがやつぱり最先端だったのか、あの年代のファッショントレンドでもね、結構勇気が要るみたいなメーカーもあつたし（笑）、すごいぶつ飛

んでるなと思うこともありました。そういうのも『オリーブ』っていう雑誌の世界観だったのかなあとthoughtです。

藤根..

私くらいの世代でも『オリーブ』がかわいいって思うのは、やっぱりさつきおつしやっていたみたいに一本筋が通っているみたいなのが、刺さるからだと思うんです。

花田..

ほんと時代を超えてで、それはすごいなって思いますね。

藤根..世界観が確立してるということなんですか。

花田..そうですね。だから、それについての本とかもあつたし、中森明夫さんとか、当時の文化人みたいな方が『オリーブ』について語るっていうようなのを、何度か私も目にしましたし、それを「オリーブ少女」っていうのを題材にした本もあつたと思うんですよ。そういう話を聞くと、すごく不思議な感じはしました。

小宮..いろいろ謎が解けてよかったです。

藤根..太いみたいな。その時代の他の雑誌でも『オリーブ』

花田..ほんとですか。意外とシンプルというか、私の学生時代そのものでした。

小宮..伺つてみないと分からんですね。本日はありがとうございました。

後注

- 1 小宮京「『読者モデル』の歴史的源流 一九七〇年代の女性ファッショントマガジンを中心に」『青山スタンダード論集』一四号（二〇一九年）。

- 2 富川淳子『ファッショントマガジンをひもとく「改訂版」』（北樹出版、二〇一七年）第二章五を参照。

- 3 小宮「『読者モデル』の歴史的源流」、小宮京「『nico1a』小史 チャイドルからニコモヘ」『史友』五二号（二〇一〇年）を参照。

- 4 『Olive』に関する現在の研究状況については、本特集収録の藤根論文を参照されたい。

- 5 以下、特記しない限り、脇川論文からの引用である。

- 6 二〇一〇年一月二三日現在、Wikipediaの花田美恵子や『Olive』の項目を参照。

- 7 「卒業してもオリーブ少女ね！」『オリーブ』一九八七年三月三日号、六二一頁。

- 8 「ふたりの背のび体験！」『オリーブ』一九八七年三月三日号、六八一六九頁。

- 9 『毎日グラフ特別冊 活人』一号（一九八五年）表紙。

- 10 栗尾美恵子 清らなザ・オリーブ少女』『活人』一号、一〇〇頁。興味深いのは、栗尾の紹介文である。「雑誌『Olive』にスナップされた写真が載り、それが大変好評だったことから、

